

令和 2 年度

横浜市立高等学校
及び
併設型中学校

自己評価書

横浜市立横浜サイエンスフロンティア
高等学校附属中学校

<学校情報>

1 課程・学科 全日制課程・理数科

2 学校長 永瀬 哲 (令和3年4月1日現在 在職3年目)

3 学校教育目標

- 1 広い視野、高い視点、多面的な見方を身につけさせ、ものごとに対する柔軟な思考力・解析力を培い、論理的頭脳を養う。
- 2 旺盛な探究力、豊かな創造力、世界に通じるコミュニケーション能力、自立力を培うことによって、よりよく生きる知恵を養う。
- 3 社会における己の使命を自覚し、積極的に社会に貢献しようとする志を養う。
- 4 人格を陶冶し、有為な社会の形成者としての品格を養う。
- 5 幅広い知識と教養を身につけ、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな心身を養う。

4 教育方針

驚きと感動による知の探究

《教育理念》

学問を広く深く学ぼうとする精神と態度を培いながら、生徒一人ひとりが持つ潜在的な独創性を引き出し、日本の将来を支える論理的な思考力と鋭敏な感性をはぐくみ、先端的な科学の知識・技術、技能を活用して、世界で幅広く活躍する人間を育成する。

5 教職員数 (令和2年12月1日現在)

学校長 1 校長代理 1 副校長 1 事務長
教諭 15 (男 10、女 5) 養護教諭 1
実習助手 事務職員 1 技能職員
A E T 1 非常勤講師 5 管理員

6 生徒在籍数 (令和2年12月1日現在)

年次(学年)	学級数	男子	女子	合計
1	2	40	40	80
2	2	40	40	80
3	2	40	40	80
4				
合計	6	120	120	240

7 回収率

		依頼数	回答数	回収率
教職員		19	19	100%
生徒	1年	80	74	93%
	2年	80	77	96%
	3年	80	76	95%
	4年	0	0	0%
	合計	240	227	95%
保護者		240	232	97%

8 自己評価実施日

教職員	令和2年12月2日～令和2年12月18日
生徒	令和2年11月4日～令和2年12月16日
保護者	令和2年11月4日～令和2年12月16日
地域	令和2年11月10日～令和3年1月15日

9 集計・分析期間

令和3年1月20日～令和3年2月22日

10 自己評価書の公表方法・時期

○集計結果は令和3年2月下旬、分析については、令和3年5月中旬以降
本校ホームページで公表の予定

<自己評価>

1 第3期横浜市教育振興基本計画の推進状況

□魅力ある高校教育の推進状況

(関連アンケート番号：教職員 1, 2, 3, 9, 10, 13, 14 生徒 I-1, 6 保護者 I-1 II-1

経年変化 1, 2, 5, 10)

取組	<ul style="list-style-type: none">○中高一貫教育による国際社会で活躍する人材の育成に向けて、6年間の計画的で継続的な教育活動の充実・推進に努めている。○「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受け、「先端科学技術の知識を活用して、世界で幅広く活躍する人間の育成」を目標としている横浜サイエンスフロンティア高校の附属中学校として、グローバルリーダーたる*1「サイエンスエリート」の育成を図っている○高等学校の*2サイエンスリテラシーにつながるサイエンススタディーズ（総合的な学習の時間）やフロンティアタイム（本校独自の週2時間の授業。自主研究、読書活動、進路探究、相談・面談等を通して豊かな感性を育み、自分自身を開拓する時間。）を核とした教科等横断的なカリキュラム編成を行うとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善を進めている。○「サイエンスエリート」に必要な*3「サイエンスの考え方」を育むために、次の4つのフェーズ 「Discussion」…物事を正確に捉えて考察し討議する 「Experiment」…仮説を立てて論理的に実証する 「Experience」…フィールドワークなど実体験から学ぶ 「Presentation」…自分の考えや意見を正確に相手に伝える <p>を繰り返す DEEP 学習を授業に取り入れ、探究心を養いながら知識と智慧のサイクルのスパイラルアップを図っている。</p> <ul style="list-style-type: none">○中高一貫教育のさらなる充実を図るため、国語、社会、数学、理科、英語、技術・家庭及び保健体育の授業で少人数授業又はチームティーチングを行い、中学と高校の教員が連携して指導している。○令和2年度は引き続き、本校に関わる外部機関（研究機関・大学・企業等）と連携しての教育活動及びICT機器（タブレット等）の活用の充実を図ってきた。 <p>*1…次世代の日本を担う使命感を持ち、科学的リテラシーを身に付け、物事をやり通す強い精神力や活動の源である体力を備えた国際社会で活躍する人材。</p> <p>*2…スーパーサイエンスハイスクールの課題研究型授業。1年次で科学的な見方・考え方、探究活動の基礎を学び、2年次に課題研究を行う。</p> <p>*3…サイエンスを学ぶことによって培われる考え方。正確な観察や実験、体験、情報の整理・分析などを合理的・総合的に進めるもので、科学のみならず、様々なものの考え方の基本につながる。</p>
----	---

<p style="text-align: center;">成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○教職員アンケートにおける「（教育課程・取組）学習指導要領の趣旨及び横浜市の方針に基づき、さらに中期学校経営方針に掲げた目標の実現を目指して編成し、取り組んでいる」及び「（教科指導・指導計画）」において経年変化を見ると、いずれも「十分に実現できている」との回答が増加している。新学習指導要領の全面実施に向けて、教職員が取り組むべき内容をしっかりと理解・共有し、実践している結果である。（1ページ教職員アンケート3,4） ○生徒アンケート項目「学校は生徒の健康管理について適切な指導をしている」において94%が肯定的な回答で、そのうち49%が「そう思う」と回答している。コロナ禍にあっても学校として生徒・家庭に情報を提供し、適切に対応することができていると考えられる。（4ページ生徒アンケート学校生活等について6） ○保護者アンケート項目「様々な教育活動を通して、先端科学技術の知識を活用して、世界で幅広く活躍する人材を育てている」及び「中高一貫校として、特色のある教育課程が計画的・継続的に展開されている。」において、いずれも90%以上が肯定的な回答である。基盤形成期である中学生が、質の高い経験や豊かな感動を仲間とともに経験し、科学の楽しさや知る喜びに気付き、充実発展期である高等学校へつなげるために、本校の特色であるDEEP学習やサイエンススタディーズ、フロンティアタイム、校外研修などの教育活動を充実させていることについて「学校便り」「学年便り」や保護者会等の機会を活用して周知し、保護者の理解を得ることができている結果である。（5ページ保護者アンケート教育活動等について1,2） ○高校の教員も附属中学校の教科指導や特別活動、部活動指導等を行うことを通して生徒や保護者に対する理解が深まるとともに、6年間を通じたカリキュラム・マネジメントを行うことにより、学習指導や学習評価についても中学の教員と共有することができている。 ○高校の開校以来11年間にわたって蓄積してきた高校のリソースや経験を生かして、外部の研究機関・大学・企業の支援を受けて総合的な学習の時間である「サイエンススタディーズ」としての出張授業や事業所見学等を実施したり、グローバルサイエンスキャンパスや各種コンテスト等に積極的に応募・参加したりしている。このことについて、学校運営協議会からも「附属中学校から高校に進学した生徒が積極的に活動しており、大変良い傾向である。生徒はよく頑張っており、引き続きよろしく願いしたい」との助言をいただいている。
<p style="text-align: center;">課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒アンケート項目「進路説明会等での進路に関する情報を十分に理解している」において経年変化を見ると、「そう思う」「ややそう思う」の合計が84%から67%に減少している。キャリア教育のいっそうの充実を図るとともに、高校での生活・学習や高校卒業後の進路について、適切に情報を提供し、6年間を見通した進路指導に引き続き取り組むことが必要である。（9ページ生徒アンケート教育活動等について5） ○中高一貫教育を推進するために、高校の教員が中学校の授業や特別活動、部活動等の指導を担当するとともに、生徒会活動や学校行事を中高合同で実施実行している。SSHとしても中高一貫を柱の一つにしており、中高の教員が一体となって中高一貫教育を推進するための適切な人事配置と人材の育成が課題である。

改善策	<p>○キャリア教育（自分づくり教育）のより実践的な活動を計画的に教育活動に入れ、活動していく。中高6年間、さらには高校卒業後の進路についても常に視野に入れ、国内はもちろん、国外の情報の提供や支援などを生徒一人ひとりの興味・関心や資質、能力に基づき、フロンティアタイムや進路だよりなど様々な教育活動において行っていく。</p> <p>○中高一貫教育のより効果的な推進のために、中高相互の情報の共有化を積極的に行っていく。中高一貫企画推進会議の充実を図る。中高で互いの授業や特別活動などの交流、参観はもちろん、生徒会活動、部活動においても「ひとつの学校」としての視点を常に持ち、協働していく。そのために分掌などでの連携を深めていく。SSHとしても中高一貫が柱の一つである。中高の教員が一体となり、中高一貫教育をスムーズに推進するため、中学教員の高校教育活動を通じての交流など、生徒にとって高一ギャップの少ない中でも、融合の刺激を意識した活動を模索する。その上で中高一貫教育としての見える化、グランドデザインの再構築を行い、教職員間の共通理解、保護者の理解を深める。</p>
------------	---

2 教育活動の状況

□教育課程の状況

（関連アンケート番号：教職員 2, 3, 4, 5, 6, 18 生徒 I-1 保護者 I-2）

取組	<p>教育課程・取組に関しては、学習指導要領の趣旨及び横浜市の方針に基づき、さらに中期学校経営方針に掲げた目標の実現を目指して編成し、中高一貫校教育校としての教育活動を積極的に推進した。</p> <p>○「サイエンスの考え方を養う」「豊かな社会性や人間性を育む」「次代を担うグローバルリーダーを育てる」を基本方針とした教育課程を編成した。</p> <p>○中高一貫校教育の特色を生かし、6年間の継続的な学びを行うために、6年間の前半3年を「基盤形成期」（中学校1～3年）と位置づけて教育課程を編成した。</p> <p>○各教科では、探究力を育てる授業として内容を深く掘り下げ、生徒の興味・関心を引き出すDEEP学習を進め、討議、体験、実験実習、発表の場を多く設定し、学習を深めている。</p> <p>○総合的な学習の時間に実施する「サイエンススタディーズ」は、自然科学や社会科学を核とした課題探究型の学習として、本校独自の教育課程を編成している。1年生では、地層見学、コミュニケーション研修や校外宿泊研修に向けた事前学習を行った。また、2年生の課題研究に向けて、課題設定の仕方について学んだ。2年生では、一人1テーマの課題研究を行い、調査・実験から得た考察をレポートにまとめ、その内容を論文にまとめた。3年生では、2年生での個人研究の経験をもとにチーム研究に取り組み、論文にまとめ、さらに発表に向けた資料づくりを行った。研修旅行にて倉敷天城中学校との科学発表交流を予定していたが実現することができなかった。学年末には、3学年合同によるサイエンススタディーズ発表会を校内で実施した。</p> <p>○教育成果の発表場面として文化祭では附属中学校生徒の学習成果物を展示し、生徒によるプレゼンテーションも行った。</p>
-----------	---

成 果	<p>○集計表 P5 学校評価アンケート【保護者】、1、2の項目で88%以上の肯定的な評価を受けており、特色ある教育課程の展開による教育活動が生徒を世界で幅広く活躍する人材育成に繋がっているものと受け止められている。</p> <p>○D E E P 学習、サイエンススタディーズの課題解決学習やプレゼンテーションを高い頻度で行ってきたことにより、1年生の「読解力」「情報活用力」「課題設定力」「課題解決力」「発表力」は着実に育成されており、2年生で課題研究を通してさらに力を伸ばしてきている。</p> <p>○集計表 P1 学校評価アンケート【教職員】、2,3,4,5の項目で、肯定的な評価の合計はそれぞれ84%以上であり、教育課程が学校教育目標や市学習指導要領、生徒の実態に合わせて工夫した編成がなされており、生徒にとって分かりやすい授業展開がなされていると判断できた。</p>
課 題	<p>○令和2年度附属中学校より本校高等学校へ進学した。附属中学校で育成した資質・能力を高等学校で十分に発揮することができていない生徒も散見されることが課題である。中高一貫教育を生かした学びにつながるようにするために、教科指導や指導計画には細部において改善の余地があり、カリキュラムマネジメントを継続的に進めていくことが必要である。</p>
改善策	<p>○本校高等学校と連携し、生徒理解のための職員研修を実施することで、中高の生徒の実態をより詳細に把握し、教科指導に生かしていくとともに、カリキュラムマネジメントを進めていく。</p> <p>○課題研究に関して、生徒が中学で行ってきた課題を高校でも継続し、さらに深めていくことができるシステムを構築するため、中学校の「サイエンススタディーズ」と高校の「サイエンスリテラシー」で相互の接続を意識した授業改善を図る。</p>

□生徒指導・教育相談の状況

(関連アンケート番号：教職員 9 生徒 6 保護者Ⅱ-1)

取 組	<p>○規範意識を高めるとともに生徒の自主性を伸ばすことを目指して生徒指導を行った。</p> <p>○コロナ禍において全員が安心安全な学校生活を送ることができるよう、健康観察票を用いた毎日の健康観察の徹底、石鹸を使用した手洗い及び手指消毒の励行、新しい生活様式についての保健指導等を行った。</p> <p>○コロナ禍のため、学校行事が例年と違う形になることが多かったが、簡単にあきらめることなく、できることを考えて実践することの大切さを繰り返し指導した。</p> <p>○例年は3回(5月、9月、1月)の教育相談を行っているが、令和2年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で休校となるなど生徒の心身への影響が心配されたため、年間を通して教育相談を行った。相談相手も担任のみに限定せず学年担当の職員も加わり幅広く相談できる体制を整えた。</p>
-----	--

<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○教員に言われる前に自分で考え行動できる生徒が増えてきた。 ○生徒は、ソーシャルディスタンスをとるなど新型コロナウイルスの感染防止を意識して学校生活を送っている。 ○コロナ禍でもできることを考え、実践する姿勢が培われた。 ○教育相談を通じて、生徒と教員の相互理解が深まった。 ○生徒が困ったり悩んだりした時に、幅広く複数の職員が相談を受けられる体制をつくることができた。
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○学校生活に慣れた後も規範意識を維持向上させるような取組を継続的に行っていく必要がある。 ○コロナ禍という特別な状況の中、生徒が頑張り続けようとして追い込まれないように、生徒の様子に注意を払いながら支援していく必要がある。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○月に1度の頻度で職員間の情報交換を行い、学年を問わず常に生徒の状況に気を配れるようにする。 ○今年度も年間を通して学年職員を中心に教育相談を行い、生徒の置かれている状況や心境の変化を察知できるような仕組みづくりを継続していく。

3 学校経営の状況

□組織運営及び教職員研修の状況

(関連アンケート番号：教職員 5, 13, 14, 15, 18、生徒 4, 5、保護者 3)

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○中高一貫教育を推進するため、中高の教職員が教育課程・教育内容・学校行事・生徒指導・進路指導等について企画・立案・実施・検証・改善を重ねるための機関として、「中高一貫企画推進会議」を定期的に（月1回）開催するとともに、その内容は職員会議で報告し全体で共有している。 ○中高合同で職員会議や職員研修会を開催し、本校の教育理念や教育目標に共有するとともに、中学校としても発達障害、生徒指導、教科指導等についての研修を行っている。 ○ベテラン及びミドルの教職員に対して適材適所の人事配置を行い、スムーズな学校運営を図っている。 ○平成29年度の開校に伴い、横浜サイエンスフロンティア高等学校・附属中学校の学校運営協議会を設置し、年4回開催している。 ○常任スーパーアドバイザー及びスーパーアドバイザー、特別科学技術顧問、科学技術顧問、教育委員会事務局高校教育課、中高の管理職で構成する科学技術顧問会議を年1回開催している。 ○常任スーパーアドバイザー及び特別科学技術顧問、高校教育課指導主事、中高の管理職で構成する幹部会を月1回開催している。
<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○2年前から設置した学校保健委員会について、令和2年度はコロナ禍により開催できなかったが、生徒の発表を中心に今後も内容の充実を図っていく。 ○新学習指導要領全面実施に向けての情報共有や研修を定期的実施した結果、教職員アンケート項目「(研究・研修)教職員が互いに研鑽し、力量を高めることができるように、校内の研究・研修体制が整えられている」については84%が肯定的回答となっている。(2ページ教職員アンケート18) ○科学技術顧問会議の開催や学校運営協議会の設置により、大学や研究機関、企業との連携を進め、本校の特徴である文理融合型の科学教育を進める中で、「サイエンスの力」×「言葉の力」を育成する教育を推進する立場から具体的な提言と実行への積極的な協力を得ることができている。科学技術顧問等の協力・支援により、キリンビール横浜工場・JEFエンジニアリング・ANAシステムソリューション、東京農工大学等の協力による校外・校内研修や講話を実施し、科学・技術と現代の生活や環境、SDGs、コミュニケーション等について実践的に学ぶ機会を得ている。 ○横浜市立中学校教育研究会等との連携を図り、本校の取組を広く発信している。 ○幹部会を開催し、常任スーパーアドバイザーや特別科学技術顧問に毎月の取組や生徒の活動について報告するとともに、学校運営や教育内容の改善・充実及び生徒の健全育成についての助言を得、学校の活性化を図ることができている。

<p style="text-align: center;">課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○管理職を除く教員が 16 名のため、一人当たりの校務が多く、負担が大きいことが課題である。 ○中高それぞれの入学者選抜に係る業務において、昨年度に引き続きこれまでの経験を踏まえて調整をすることができ、教職員の負担を少し軽減することができた。今後は、業務マニュアル等を整理することにより、入学者選抜業務について中高で共有し、業務を調整しながら、教職員の負担をさらに軽減していくことが課題である。 ○教職員アンケート項目「（職員組織）一人ひとりの教職員が意欲をもって業務に取り組むことができる組織である」の経年変化を見ると、「十分に実現できている」との回答が 63 %から 37%に減少している。コロナ禍により先を見通すことが難しい状況が続く中で業務に取り組んでいることが影響していると考えられるが、組織や会議の在り方を常に見直し、学校評価等の機会を通じて取組の成果を「見える化」するなど、教職員のモチベーションを高める体制の構築と整備が課題である。（5 ページ教職員アンケート 15） ○令和 2 年度は A E T ・学校司書・非常勤講師等年度当初より配置されたが、引き続き学校司書や非常勤講師の円滑な配置をすることが課題である。
<p style="text-align: center;">改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○令和 2 年度の反省を生かし、各校務分掌の担当業務及び人員配置を再整理し、効率的に業務を進めることができるようにする。人数が少ない分、効率的な業務のために積極的に I C T の活用を進めていく。それによって生まれた時間を教員の自己研鑽の時間として、それぞれの教員の社会性のある深い学びを通して、教育活動にフィードバックしていく。 ○令和 2 年度は、コロナ禍において、教職員の意欲に反して、活動を制限されることが多かった。令和 3 年度については、その経験を生かし、先を見通し、教職員の力を結集し、創意工夫の中から、今だからこそできること、今ではないとできないことを企画運営していく。特に一人一台の ICT 端末の活用で、生徒、保護者との情報のやり取りや最新の ICT 活用を、情報モラルを持った上で積極的に行っていく。本校の特色を生かした支援や対応を積極的に行う。 ○A E T ・学校司書・非常勤講師等年度当初より配置され、引き続き A E T や学校司書、非常勤講師との情報の共有や円滑な協働活動のために、チームとしての意識を持ち、教職員間のフラットなコミュニケーションを軸に活動の強化をしていく。

□学校に関する情報公開の状況

(関連アンケート番号：教職員 27、保護者Ⅱ-5、生徒Ⅱ-5、地域 9)

取組	<ul style="list-style-type: none">○夏の学校説明会では新型コロナウイルス感染症対策として、web 上での配信を行う。○「Science Frontier Junior High School News」を発行し、学校の様子を外部に発信する。○学校案内パンフレットは生徒のキャッチフレーズや、新しい写真を掲載し、より良いものを仕上げる。○学校説明会、志願説明会、オープンスクールなどの情報をタイムリーに Web サイトへ掲載する。
成果	<ul style="list-style-type: none">○夏の学校説明会では、メディア委員が学校紹介のスライドを作成し、例年行っていた生徒目線での学校紹介を継続することができた。○「Science Frontier Junior High School News」を発行し、特に本校の特色である「ほんもの体験」について外部に効果的に発信することができた。○学校案内パンフレットでは、写真を最新のものにアップデートしたり、生徒が考案したキャッチコピーを掲載したりするなどの工夫をして、受検を考えている児童や保護者に有効な情報を提供することができた。また、初年度から継続して使用していた表紙絵を変更した。○学校説明会・志願説明会等の告知や、「学校便り」の掲載等、本校に関わる情報をタイムリーに学校ウェブサイトに掲載することができた。○昨年度末からスタートしたダイアリーの更新を行うことができた。
課題	<p>○Web サイトでは主に、適性検査の情報や学校便り、学校行事のお知らせ、在校生向けの急を要する連絡を掲載した。ダイアリーの更新を昨年度末から行い、令和 2 年度の 12 月ごろまでは頻繁に更新ができた。しかし、1 月からは適性検査関係の業務におされ、更新が滞ってしまった。令和 3 年度はダイアリーの更新をさらに計画的に行っていきたい。</p>
改善策	<p>○ホームページのダイアリーには、今後も読み手のニーズに応えられるように、本校の特色や独自の取組を中心とした内容を掲載していく。また、学校だよりや学年だより等に掲載された内容をもとに、ダイアリーの内容を検討、作成することで、年間を通して計画的に更新できるように努める。</p>

4 いじめへの対応に関する項目

□いじめへの対応

(関連アンケート番号：教職員 28 生徒Ⅲ-4、5)

取組	<ul style="list-style-type: none">○いじめに関するアンケートを4回実施するとともに、生徒一人ひとりと教育相談を行った。○YPアセスメントを活用して客観的に学級の現状を分析し、学校全体で情報の共有を図った。○いじめ防止対策委員会を毎月開催し、情報の共有を図った。○学年集会や学級において、いじめは絶対に許されない行為であることを教員から生徒に伝え、いじめに対して毅然とした態度で対応することを示した。
成果	<ul style="list-style-type: none">○教育相談を担当だけでなく学年の多くの職員が行ったことで、生徒との信頼関係を深めることができた。○全ての教科の授業で話し合い活動を行い、生徒同士が自分の意見を発信し、他の意見を受信することがスムーズに行われるようになってきた。○生徒に関わっている職員が綿密に情報交換を行うことで、生徒の些細な変化に気づき対応することができた。○いじめ行為や嫌がらせ事案に対して丁寧かつ継続的な指導を行ったことにより、そのような行為が継続しているという情報は無い。
課題	<ul style="list-style-type: none">○人間関係が深まるにつれて遠慮がなくなり、他者に対しての強い言動や相手のことを考えていないような行動がみられる。そのことに対して見過ごすことなく指導していくことが課題である。○全職員がいじめは発生するということを常に意識し、指導及び支援を継続していく体制を整えることが必要である。
改善策	<ul style="list-style-type: none">○普段から生徒とのコミュニケーションを密に行い、気になる場面に遭遇した際に声を掛けられるような人間関係の構築に努める。○今年度も教育相談やいじめに関するアンケートを実施し、学級や学年の状況把握に努めるとともに、YPアセスメントなどを利用して、客観的に状況を分析し職員全体での共通理解を図る。